



〈無垢な被害者〉 イメージと現実

ツバルで地球温暖化報道を考える

こばやし まこと
小林 誠

首都大学東京大学院社会科学研究所
博士後期課程

こばやし まこと●専攻は社会人類学、オセアニア地域研究。ジャパンファウンデーションのアジア次世代リーダーフェローとして、2006年3月31日～07年3月30日、地球温暖化に起因する海面上昇による被害が叫ばれているツバルにて調査を行なう。現在は、環境問題の人類学的研究に関心がある。



↑海岸沿いのココヤシ。ココヤシの実はかつて最も重要な食糧の一つであった
写真提供：筆者（以下も同じ）



現 地に行かないとわからないこともある。至極当然のことからの書き出しで恐縮であるが、これが1年間ツバルに滞在した私の率直な感想だ。

ツバルは南太平洋の日付変更線のすぐ西、赤道のすぐ南あたりに位置し、地理的な区分からいうとポリネシアに属する。9つのサンゴ島によって構成される国土の総面積は約26万平方キロメートル、人口は約1万人と世界で最も小さな国の1つである。

この国は日本において、近年、多大な注目を集めており、新聞、雑誌、テレビなどで報道されることが、もはやあまり珍しくなくなってきた。ツバルが報道されるとき、それは必ずといっていいほど地球温暖化という文脈においてである。ツバルは、標高が最高でも数メートルであり、地球温暖化に起因する海面上昇によって〈沈む国〉といわれている。

ツバルは次のように表象されることが多い。

「人々は自給自足的な生活を営み、自然と共生してきた。しかし、近

年、高波、島の浸食、さらには塩害によるタロイモの収穫量の低下といった海面上昇による被害が深刻化している。そもそも、海面上昇の原因は経済を発展させるために先進国が大量に排出してきた温室効果ガスである。ツバルは温室効果ガスをほとんど排出しないにもかかわらず、地球温暖化に起因する海面上昇によって沈没の危機にある」

つまり、ツバルは、自然と共生しているにもかかわらず、地球温暖化の犠牲となる被害者として表象されるのである。ツバルが地球温暖化の被害者である、もしくは、被害者になる可能性があることに異議を唱えるつもりはないが、ツバルの人々の生活が自給自足的であり、自然と共生したものであると二面的に表象されていることに對しては、とまどいを覚える。

確かに、ツバルにおいては現在でも漁、豚の飼育、ココヤシの採取、タロイモの栽培といった伝統的な生業活動によって食糧を確保することも多い。しかし、首都のフナフティでは食糧の大部



食糧品を求めて店に詰めかける人々。店には、食糧品のほか、日用品、洋服などが一通り揃っている

分を輸入食品に依存している人がかなりの割合を占めている。首都のあるフナフティ島以外の島においても、船が到着すると、人々は店に並んだばかりの米、小麦粉、砂糖、冷凍肉、缶詰の魚、鶏卵などの食料品を買いに走る。子どもや若者は、伝統的な食事を好まず、輸入食品を多く食べる傾向がある。こうした食生活の変化の背景に

は、急速に貨幣経済へと移行してきたツバルの経済状況がある。2002年現在、全人口のうち15歳以上の賃金労働に従事する人は首都では約5割に、ツバル全体でも約3割にのぼる。さらに、海外からの送金も一般的であり、こうしたお金を、食糧や日用品の購入、電気、子どもの教育などにかかる経費にあてている。

貨幣経済への移行は、バイクの所有率にも象徴的に表われている。ツバルでバイクを購入するとすると日本円換算で最低数十万円はかかり、さらには、燃料費も日々かさんでいく。ある程度のもまとまったお金がないとバイクを所有できないのだが、02年現在、全世界のうち約半分がバイクを所有しているという。多くの人がバイクに乗って島の中を移動し、狭い島の中でドライブを楽しむ者もいる。こうした状況を考えると、自給自足的であるという表象はあまりふさわしくないだろう。

また、現地滞在中によく聞いた言葉に「発展 (Atakega)」がある。意味合いは多様だが、インフ

ラの整備や現金収入の増加とされることが多い。多くの人が、自給自足的な生活ではなく、教育、医療、交通機関の整備や、政府や会社での雇用を求めている。

以上のように、日本における表象とは異なり、現在のツバルは貨幣

経済として成り立っている側面が大きい。この表象と現地の実態との乖離は何を意味するのであろうか。

報道において、ツバルは地球温暖化の被害の象徴と謳われている。地球温暖化の被害の象徴としてふさわしいのは、賃金労働に従事し、バイクを乗り回すツバルではなく、自然と共生する自給自足的な生活をする素朴なツバルであろう。自給自足や自然との共生という言葉によって喚起されるものは、温室効果ガスをほとんど排出しない生活、化石燃料に頼る先進国から失われてしまった生活といったものだろうか。つまり、地球温暖化報道において、ツバルは



バイクに二人乗りした若者。バイクは島内での移動に欠かせない交通手段で、約半数の世帯に普及している

「無垢な被害者」としての役割を担っているのである。

もっとも、地球温暖化の進展を止め、ひいてはツバルの人々の生活を守るという目的のため、報道において「無垢な被害者」という表象が戦略的に使われ、先進国の温室効果ガスの排出削減を訴えようとしているとも考えられる。しかし、私は、この現状とは乖離した表象によって、われわれのツバル理解やわれわれとツバルとの間の対話に大きな代償を払ってしまっているのではないかと危惧する。